日出晴夫のITな話

日出 晴夫
中小企業診断士。阿南市在住
http://www.facebook.com/haruo.hinode

黄金週間です

このコラムでも、何度も触れたことですが、一年で最も過ごし易い季節となりました。皆さんは、いかがお過ごしでしょうか？

この稿が配布される頃には、行楽地は家族連れで賑わうことでしょう。かくいう私自身も、それなりの家族サービスに終始した頃もありましたし、出来れば今後も、良き家族員たることに努めたいと願っています。

年度が替わって、日常生活が落ち着きを取り戻した頃、家族の風景が動き出すのです。中産階級？の仲睦まじい夫婦と二～三人の健康な子供達で構成される「ファミリー」とその予備軍である仲の良いカップルが集うテーマパークは平和の象徴でもあります。

ファミリーというもの

家族論を語る時、引き合いに出すのが、ソーントン・ワイルダーによる音楽劇「わが町」です。原作者は、ユージン・オニール、アーサー・ミラー、テネシー・ウィリアムズとならんで「現代アメリカ演劇の偉大なる四人」に数えられ、演劇史に名を残しています。

この作品は、１９３８年に発表されて以来、アメリカだけでなく世界中で上演され、劇場でかからない夜はないと言われています。丁度、二年前の市民劇場の例会でもありました（図①）。

平凡な日常から垣間見るコミュニティーの有様と運命よりする人生論を語る機会となりました。ストーリーはいたってシンプルで、アメリカのある小さな町に暮らす平凡な人々の日常をスケッチしたものです。二人の男女、ジョージとエミリーは大人たちに見守られて育ち、やがて結婚します。幸せな結婚生活が続くのですが、数年の後、エミリーの体には不幸が起きます。物語の終盤ではエミリーら死者たちが自らの生活や愛した人々を振り返り、幕は閉じられました。

実は、この物語の映画版を、幼年期に見ているのです。生まれた町に育ち、育った場所で勤め、幼馴染と結婚し、そして病に落ち、死んでいく。当たり前の人生ストーリーなのかも知れませんが、あまりにも平凡で、正直、「物足りない話」とも思えたものです。しか一昨年の舞台では、抵抗なくストーリーに入り込めました。流石に、自分自身の年齢を感じたものです。

図①：徳島市民劇場2013年5月例会

人とコミュニティ

「共同幻想論」という言葉がありました。人は、何らかのコミュニティを求めるのは当然であって、これらを国家論にまで拡張する議論でした。戦後民主主義の停滞期に、一世を風靡しました。60年代から70年代にかけて多くのファンを獲得しました。かく云う私も、書籍を購入&読んだような気分になっていたものです。コミュニティー論とは、ややこしいものだったのです。

近代主義の晴れ舞台

前置きが長くなりました。民主主義とは、合理的で論理的な世界感と一体であるという考え方がありました。独立した市民が合理的な行動を行うことにより、より良き社会が築かれるという予定調和説でもあります。現在では、虚妄としか思えない議論ではありますが、今でも、一定の存在価値があるようです。そんな期待を持たせてくれるのが、市民劇場五月例会、二年前の「わが町」と同じ俳優座劇場プロディースによる舞台なのです。

十二人の怒れる男たち

「近代主義の晴れ舞台」という表現を最も当て嵌めたいのが五月例会、「十二人の怒れる男たち」です（図②）。キャスティングは一部、二年前と重なっています。

中学生の頃、この作品の映画版を体験しました（図③）。社会経験も殆どない頃のこと、陪審員制度というものも、この映画を通じて知ったものです。（日本では、この制度は無いということを知ったのは、かなり後のことでした。

ストーリー自体はかなり単純なのです。殺人事件の裁判を舞台として、主人公?（陪審員八号のヘンリー・フォンダ）が、評決の大勢に小さな疑問を持ち、議論と会話により、徐々に味方を増やし、最終的には、全員の合意により、無罪評決を得るという展開です。

訥々として自説を展開するヘンリーフォンダ、反発しながらも評決を変更してゆく勇気ある他の陪審員たち。欧米の風土、景色の素晴らしさを見た思いでした。（戦争に負けるのも当然です。当時、本気で思ったものです。）

より印象的だったのは、結審後の別れ際のシーン、普通の市民生活に戻る時のフォンダの表情のさり気なさ。舞台表現として、どのような手法を使うのか、原康義さんの演技にも期待しています。

図②：2015年5月例会ポスター

図③：HenryFondaの凛々しさ